

小野 あずさ

コンテンポラリーダンス照明1

ここ20年の間に、コンテンポラリーダンス界で名を上げて来た照明家、3名をご紹介したいと思います。ルーシー・キャーター、マイケル・ハル、そしてガイ・ホー。それぞれの個性、考え方、スタイルを見ていきたいと思います。

ルーシー・キャーターは、オペラ、バレエ、コンテンポラリーダンスでオリバー賞を含む、数々の賞を受賞し、イギリスで注目を浴びる照明家の1人です。彼女は何年も、ダンスカンパニー「ランダム・ダンス」とコラボレーションをしています。ランダムダンスの振付家、ウェイン・マクレガーは、身体と精神を通して、アートと科学の境界線を追求する、ユニークで斬新な作品を作ることで知られています。最先端のテクノロジー、音楽、映像、照明を駆使し、ダンスのスピード、展開が速く、テクニカルムーブメント（スピン、ステップ、リフトを尋常ではない速さ、うねり、角度で踊る、見ていてたまに「人間ではない!?」と思うくらいの動き）を多く取り入れた、振り付けと演出で有名です。

私がたまに働いているコンテンポラリーダンス専門の劇場、ラーバンシアターに、ランダムダンスは新しい作品の作り込み（テクニカルリハーサルとツアーの準備）があるたびに、劇場を貸し切りにやってきます。

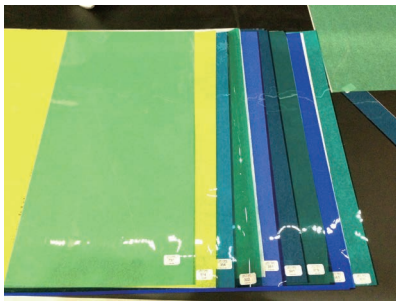
数年前のEntityという演目は、巨大なクレーン3台（ダンサーが手動で動かす）の先っちょに長方形の巨大スクリーンがついていて、そのスクリーン3台がステージを囲むようになっています。そして、その後ろにルーシーが並べた、サイドライトの数が凄まじく多かったのは、今でも忘れません。しかも、それらの色は同系色ばかりの色で、スクリーンが下がっているときは、スクリーンをホリゾン代わりに染め、スクリーンが上がったときは、サイドライトとして使われていました。ルーシーの色の混ぜ具合、グラデーションはほかでは見れない、LEDでも作れないような、絶妙のものでした。

ルーシー「照明はすべての見え方に影響するわ。時には、どこかにとても不快な気持ちを覚えるの。それは単に、照明が最悪だったというのが主な理由。照明は私にとって、とても感情に訴えてくるものだから。」

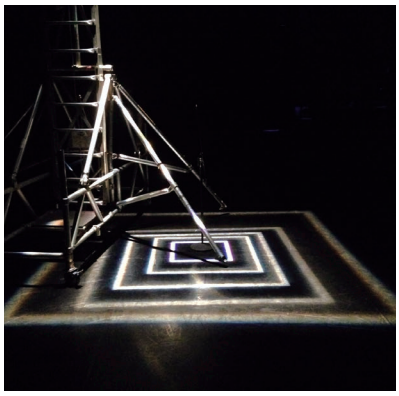
舞台上の明かりを、ほんの少しだけ変化させながら、彼女はこう述べていました。「もしこの明かりが外から差し込む太陽光だったら、って思うの。さっきまで鮮やかだった芝生が今では、どす黒く見えるのはなぜだろう。」彼女がセレクトした色は、彩度の変化を滑らかに、繊細に表現するためのものでした。

Farという作品では、rAndom Internationalというグループがデザインをした、LEDパネルを背景に使って、照明をされていました。余談ですが、rAndom Internationalは、センサーでダンサーの動きに合わせて明かりを揺るがせたり（ピクセルマッピング）、影の移動と影の集合体でできるアニメーションを作るパイオニアです。LEDによって揺れ動くように見える壁、目つぶしになる壁、電光掲示板にもなる壁、高さ、広さを圧縮させるように見せる壁。ルーシーがどこまで、このLEDの壁をプログラムしたかは謎ですが、ここまで派手に背景を構成しておきながら、それが独り立ちせず、ちゃんとダンサーとその他のスペースに解け合っていたのを見ると，彼女がプログラムに携わったのだろうなと思います。

In the pursuit of I.T. という作品では、四角形の縁が切り取られたゴボ5枚を、角度がすべて違う5灯のソースフォーに入れて、それらを舞台床で重ね合わせて、四角形の連続構成を作っていました。それは、光量によっては、床から角が飛び出したように、立体的に見える光の絵でした。照明が3D映像を造り出すとはこういうことなのかと思いました。彼女が、ランダムダンスとコラボレーションするたびに、毎回全く違った手法で、幾何学的、科学的照明を魅せてくれます。それは、色、温度、シャープさ、空間の切り取り、時間の刻みを、ダンサーの動き、姿に正確に重ね合わせて、初めて完成できるものだと、観劇するたびに関心させられます。



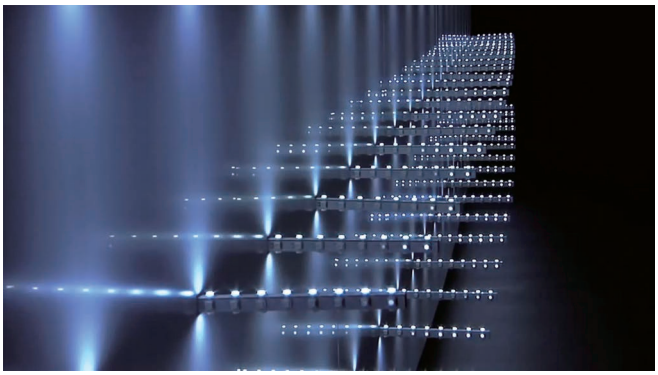
ルーシーの色コレクション　“Entity”



四角形ゴボの連続構成（全て同じサス吊り）
“In the pursuit of I.T.”



影の線を織り成す背景のLEDパネルとダンサー　“Far”



LEDスティックが等間隔に配置されたLEDパネル　“Far”